

## 論考

# ミンダナオの子どもたち、日本の若者たち

松居 友

(構成・菊地知子)

二〇〇〇年・二〇〇二年の空爆を含む大規模な戦闘でイスラム地域に多数の避難民が出ていた

国連の調査によるとミンダナオの避難民の数は累計で世界最高だという

一九七〇年代から、数年おきに繰り返し起こる大規模な戦闘ばかりがミンダナオ子ども図書館を起こしたきっかけは、

偶然避難民のキャンプに連れて行ってもらった時のショック

なんと、地平線まで続くかと思われる避難民の群れ

ヤシの葉で葺いた、小屋ともいえないようなものの下で、一年以上も生活している何よりも心が痛んだのは、陽気なはずのミンダナオの子どもたちが、全く笑わないこと

そのときぼくの脳裏に、MCLの構想が浮かんだ

若者たちによる、読み語り、医療、スカラシップ

その後、二〇〇八年にも80万の避難民が発生

そのときは、ミンダナオ子ども図書館の若者たちが

どこのNGOよりも早く、避難民救済に活躍した

地元出身の多くのイスラム教徒の奨学生とキリスト教徒、マノボ族の学生たちが力を合わせ…

宗教や民族、文化の違いを越えて平和を築くこと

子どもの、子どもたちによる、子どもたちのためのミンダナオ子ども図書館

(MCL紹介パンフレット 表紙より)

「ミンダナオ」ってご存じですか？ ミンダナオはフィリピンに三千から四千あるといわれている島の一つです。ミンダナオ子ども図書館は、二〇〇三年に発足した現地法人で、正式名はMindanao Children's Library Foundation, Inc.、略してMCLと呼ばれています。ミンダナオの内陸部、フィリピン最高峰のアポ山の山麓、コバト州のキダパワン市に本部があります。

この地域には、六百年前に西からイスラム教の人たちが、四百年ほど前には北からキリスト教の人たちが入ってきて、それ以外の山に近い所に先住民族が住んでいて、違いがあっても仲良くやっていました。大戦後、「約束の土地」といわれる豊かな土地や資源をめぐる利権争いが絡んでいると思われる紛争が、第三者の手で作為的に作り出されているような所なので、マニラに住んでいる人に「ミンダナオに住んでるんです」と言うと、必ず「よくあんな怖い所に住んでいますね」と言われます。そうでありつつ、ここでは、孤独感がない。日本に来ると、想像を絶する孤独感に見舞われ、人同士の温かい交流や愛情に満ちた支え合いの心のあるミンダナオに帰りたくなります。

## 読み語り、文化活動、保育所建設

MC Lは、現時点では公共建築としての図書館ではなく、1.5ヘクタールの農地内に宿泊できる本部があり、そこに図書室をもち、住み込んでいる奨学生たちが、休日に僻村や避難民キャンプに読み語りに行くという形態の文化・教育活動を行っています。

読み語りでは、マノボ族にはマノボ語、イスラム教徒にはマギンダナオ語など、子どもたちが父母祖父母、さらにその父母からもらった（受け継いだ）言葉で語ります。絵本だけでなく現地に残る昔話を語ったり、イスラム、クリスチャン、マノボ族の歌などをみんなで歌ったり踊ったり劇をしたりして、僻村の子どもたちと楽しく遊び、交流します。また、若者たちが自主的に行う文化活動として、文化祭があり、異なった宗教、民族の文化を披露し、食事を共にし、相互の理解を深めています。

また、フィリピン政府が、保育所を経由しない子は小学校に入学できない、という規定を作り強化しているため、特に山岳部や貧困率の高い地に、保育所を建設することが喫緊の課題です。日本から寄付を募り、保育所建設を次々と進めているところです。

## スカラシップ、共同生活、コミュニティ

MC Lの奨学生は、小学校から大学まで、約五百名（二〇一〇年）を数え、孤児、ひとり親、



▲読み語りの様子

崩壊家庭で極貧の子を優先して採用し、その中で約百名ほどの子が本部で共同生活を営んでいます。イスラムの子もキリスト教の子も、原住民のマノボの子も一緒に暮らしていて、食事も百人の食卓です。私も一緒に食べていますが、百人がいる、という感じではありません。一人ひとりが居る、という感じがします。

フィリピンの子たちは、うちのMCLの子どもたちもそうですが、本当に明るい。心がとてもオープンなのか、心に壁を作っていない感じがあります。生きる力、というのは本当は何なのかを、私は彼らから学びました。私たちは生きる力というと、頑張らなきゃいけない、競争に勝たないといけない、とにかく生き抜かなきゃいけない、そうできないと落ちこぼれだとか、努力が足りないなどと思っているのではないのでしょうか。ミンダナオでは全然違う。生きる力というのは、誰かがちょっと落ち込んでいても、それにすぐに気がついて寄ってきて、肩を抱いたり話しかけたりする。つまり、お互いに分かち合い、わかり合って、お互いが愛情の中に居る。寂しさとか悲しさがなくなっていく。MCLの子たちにも親のない子が多いですが、そういう子たちが村にも居る。子どもたちだけ五人の家とか。それでちゃんと村で生きているんです。もしも日本で子どもたちだけでそうやって居たら、餓死するしかない。でもそこで生きていられるのはなぜかという点、友達も居るし、周りの人たちも支えてくれているから、生きるんです。死のうと思わない。孤独感が本当にはないんです。これが力だと思えます。コミュニティが生きている、ということ。それは、行政による地域社会、集団社会が機能しているというのではなく、互いのコミュニケーションが生きている、友情や愛情が生きている社会です。コミュニティとは、隣の人を自分のように愛すること、と考え、それを広げていけば、

戦争もなくなるはずです。

## 日本の若者たち

就職など、かつてと異なる厳しさのある中、年長者が築いてきた「現在」に見切りをつけて、それを打開し新たな生き方を模索しようとする気配を感じます。MCLに来る日本の若者たちがよく、「また帰って来るからね。私のことを忘れないでね」と泣きながら帰っていきます。日本で孤独の中に住んでいて、愛や友情に飢えて満たされることのない心が、現地の子どもたちとの出会いでどっと開かれ、心の奥底にしまいこんで失われたと感じていた自分自身が一気に回復するのでしょうか。

MCLの子どもたちには、「君たちが、（経済的に豊かだけれど心の貧しさのある）日本人を助けてやってくれ」と言っています。そして日本の若者には、「子どもたちを助けよう、と思う前に、子どもたちと友達になってください。友達になれば、相手のためにできること、必要としているものがわかってきます」と伝えたいと思います。

（ミンダナオ子ども図書館館長・著述業）

\*この記事は、松居友氏に承諾を得、MCL紹介パンフレット、お茶の水女子大学の授業でのお話、HP記事をもとに、菊地知子（お茶の水女子大学）が構成しました。